



紙の本の官能 石田衣良

電子書籍のために、初めて小説を書いた。二十枚の短篇で、つきあってきた女の子が最後に難病で死んでしまう大学生の話だ。ベタなものも書いてみると、意外と心地いいものです。タイトルは「ありがとう」という。それだけで川端康成の「有難う」を思い浮かべる人がいたらたいへんなのですが、実は川端作品の素晴らしい技巧を再利用した短篇なのだ。具体的には、冒頭と終わりの数行をまったく同じ形にする。ありがとうという短い言葉の繰り返しリズムで、クワイマックスを構成する。「有難う」は『掌の小説』というショートショート集に収録された、ほんの四ページほどの掌篇なので、書店で立ち読みでもしてみてください(店先で泣いちゃっても知りませんよ)。そのあとネット経由で「あり

がとう」をダウンロードしてeペーパーで読むと、同じ技巧が時代によってどんなふうに変えられたか、きつと楽しめる。小説の質感も、文庫本とeペーパーくらいの違いがあるはず。

小説を書くこと自体では、電子書籍でも紙の書籍でも、基本的な姿勢に変化はありません。ほくは電子書籍の編集者から、新しい携帯読書端末のさまざまな利点を学びました。一台に数百冊の本を記憶させておくことができます。文字の級数だつていくらでも変えられる(これは高齢者にはうれしい機能でしょう)。電子辞書ははいつているし、朗読機能もついている。まさに夢のような二十一世紀型の読書スタイルなのですが、ひとりになって紙の本ともちくちくみてみる、やっぱりぜんぜん違つたのです。

ここが違うのか。まだまだ電子書籍には、紙の本がもっている官能が決定的に欠けているのです。手にもつたときのふれ心地。しなやかにしなるページの腰をこらしたカバーデザインの見事さ。紙には金属やプラスチックがもつ冷たさがあります。最初はちょっとひやりとしても、すぐに人肌になじんで、いつのま



石田衣良(いしだ-いら) 1960年東京都生まれ。成蹊大学経済学部卒。広告プロダクションを経て、フリーランスのコピーライターに。97年『池袋ウエストゲートパーク』で第36回オール讀物推理小説新人賞を受賞。03年『4TEEN フォーティーン』で、第129回直木三十五賞を受賞。著書に『婚年』『1ポンドの悲しみ』など多数。

にか体温を返してくるようなやわらかさがある。これはいい文章を読み始めたときの印象にくく近いもので、内容と器が見事に寄り添っているから、紙の書籍はこれほどの歴史的大成功を収め続けているのでしよう。

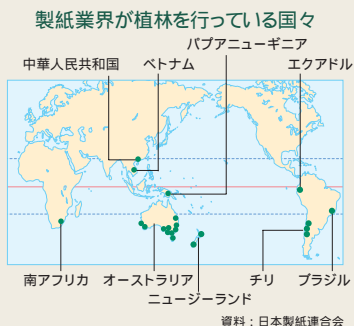
作家の生活にとって、本はなくてはならないものです。これほど膨大な数の本がまわっていて、それでもつぎの一冊を書く。飽きずに読み、飽きずに書く。砂漠にひと粒の砂を落とすような仕事です。それが空しくならないのは、実は砂粒のひとつひとつがひどく魅力的だからなのです。ほくは今でも本屋の書棚のあいだを歩くのが大好きです。確かにすべてがい本とはいえないでしょう。ほくのボもいつかはこの棚から消えてしまいかもしれない。それでも一冊の本を手にして読み始めると、砂粒は緑豊かな楽園に姿を変えるのです。それは紙とそこに記された言葉の組みあわせだけが可能にする魔法の力です。

PAPER Q&A Vol.4

Q. 製紙業界は、なぜ、植林をしているんですか?

A. 木を「育てる原料」として、考えているからです。

製紙業界では紙の原料を安定確保するため、国内13万ha、海外9カ国において35万ha規模の植林を行っています。荒れた土地や牧草地を中心に、ユーカリやアカシアなど約10年で成木となる早成樹を植え、<植樹 若木 成木 伐採 植樹……>という計画的なサイクルで植林をしています。2010年までに計55万haへ。これが私達の目標です。



製紙業界が植林を行っている国々
パプアニューギニア



次回は9月30日号、室井佑月さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>